

竹村牧男著 『唯識三性説の研究』

池田道浩

一 はじめに

三性説が瑜伽行派における最も代表的な思想の一つであることは言うまでもない。その三性説研究に関する最新の成果が平成七年二月に出版された竹村牧男著『唯識三性説の研究』である。本書は瑜伽行派の思想的研究を志す者にとって極めて有益なものであり、将来にわたって学会を潤し続けると考えられる重要な研究書である。

出版から既に二年以上も過ぎてしまい、いささか時期を逸してしまつた感はあるが、本書に対する若干の書評を試みたい。

まず最初に告白しておかなければならないが、広範な知識に裏打ちされた著者の綿密な議論に筆者は圧倒されている。一口に三性説の研究とは言っても、本書の話題は非常に多岐にわたっており、すべての内容を吟味することは到底不可能である。従つて、ごく限定されたほんのわずかな項目について若干の考察を行いたい。筆者自身の見解は極めて少ないと思われるが、本書の紹介の一助となれば幸いである。

本書の最大の特徴は、本書に採用された方法論と、その方法論に

よつて導かれた以下の結論である。本書評の最大の目的はこの見解を世に紹介することである。

以上において、従来の三性説の一般的理解に相違し、弥勒等から護法に至るまで、瑜伽行派では一貫して同一の論理構造が継承されていたことを実証したのである。(「はしがき」iii頁)

筆者の知る限り本書には既に二つの書評が存在する。

向井亮「竹村牧男著『唯識三性説の研究』、『印度哲学仏教学』第十号、一九九五年、九月、三九九―四〇〇頁

この向井氏の書評は小編であり、本書の紹介を目的とするものだと思われる。向井氏は

初期唯識文献の成立過程や唯識思想の学派相承などの問題を考えるとき、その教説・学説に表面上の説相の差異が認められ、ても、その間に一貫した同一の論理構造が継承されていた、という第一の論旨はとても重要である。(前掲書評四〇〇頁)と評されている。

兵藤一夫「竹村牧男著『唯識三性説の研究』」「仏教学セミナー」第六二号、一九九五年、十月、三十四—四十六頁。

兵藤氏は三性説に関して積極的に発言されている研究者の一人である。氏の書評は本書の内容を手際よくまとめ、かつ、適切に問題点を指摘している。また、随所に氏自身の三性説に関する見解が述べられており、はなはだ有益である。今回の筆者の書評は兵藤氏の書評を超えるものとはならないであろう。

二 構成と内容

まず、本書のおおまかな目次と、それに対する著者自身による「はしがき」の内容紹介を提示する。本来であれば、筆者自身の言葉によつて紹介しなければならないのであるが、内容があまりにも多彩であり、筆者の能力では要約もできないのである。この著者自身の「はしがき」には本書の全ての内容が的確に集約されており、いささか長い引用であるがこれをお読みいただければ、本書評の目的はほぼ達せられることになる。また、筆者から見て極めて重要だと思われる個所には傍線を付した。

序章

第一部 三性説の種々相

第一章 三性説の起源

第二章 三性説の基本構造

第三章 弥勒論書の三性説

第四章 世親の三性説——『唯識三十頌』から

第五章 『成唯識論』の伝える安慧の三性説

第二部 三性説の哲学的究明

第一編 遍計所執性の周辺

第一章 言語の存在論的性格

第二章 言語と意味論

第三章 五感と意識

第四章 認識過程と言語

第二編 依他起性の周辺

第一章 現象世界の存在論的性格

第二章 存在の多元論的解釈

第三章 多元論と縁起説

第四章 認識理論の展開

第三編 円成実性の周辺

第一章 現象世界の実性

第二章 存在と普遍

第三章 実存の転換

第四章 覚の世界

本研究は、大きく分けて、序章・第一部・第二部の三部から成る。序章には主として三性説の研究史と本研究の方法論について記した。三性説は唯識哲学の要といふべき重要な思想であり、すでに世親以後の頃から、異なる学説が主張されていた。近來の研究においてもたとえば宇井伯壽は弥勒・無著・世親らの三性説を陳那以後、護法らの三性説とは著しく異なるとし、また真諦訳を重視する上田義文と玄奘訳やチベット語訳をも尊重する長尾雅人との間には論争がなされたりした。こうした中

で、三性説研究の課題の焦点は、まず第一に、弥勒・無著・世親らの三性説を、彼ら自身の著作の中から明らかにすること、そして第二に、護法の立場が、それとはいかなる関係にあるのかを精確に判定すること、であろう。その場合、単に言語に表わされた地平のみでなく、その深層構造にまで迫って考究することが求められよう。

本研究は、こうした課題にとりくむが、その場合、方法論として、今日の学会で主流となっている、サンسكريット・チベット語訳・漢訳の諸文献を、公平にかつ総合的に扱う立場に立つ。そしてインドにおける、無著等より護法の頃までの思想史を忠実に辿ることとするが、しかし、本研究では単に思想史にとどまることなく、三性説の論理的妥当性はどのように求められるかを、どこまでも究明しようとした。またその中で、哲学上の諸問題に関係する仏教独特の理路の自覚を追求しようとした。

第一部、三性説の種々相は、種々の唯識文献に説かれている三性説の基本的な了解を求めたものである。

第一章、三性説の起源では、まず、『般若経』、『成実論』をとりあげ、三性説との関連を探った。しかし、起源と指摘したものではない。さらに『菩薩地』、『真実義品』を扱い、そこに説かれる、仮設事—離言法性の説に三性説の萌芽を見出している。第二章、三性説の基本構造は、まず、唯識文献として最も初期のものと考えられる『解深密経』、『瑜伽師地論』(撰決撰分)の三性説を認識した。それは、ほぼ、言語(名言所計)—事(因縁所生)—実性(真如)において語られる三性説であり、未だ、

竹村牧男著 『唯識三性説の研究』(池田)

識との関係が詳しく論じられてはいないものである。次に、無著の『撰大乘論』の三性説をも、ここに一覽した。『撰大乘論』の三性説は虚妄分別・識と結合したもののだが、基本的には、『瑜伽論』等の三性説をふまえたのであることを明かした。

第三章、弥勒論書の三性説は、『大乘莊嚴経論』と『弁中辺論』の三性説を検討したものである。『大乘莊嚴経論』の三性説も、遍計所執性は言語にかかる領域として、依他起性は虚妄分別に具わるいわば十八界として説かれており、一方、『弁中辺論』においても、やはり虚妄分別において顕現する十八界は依他起性その実体視されたものは遍計所執性であつて、弥勒論書といえども、決して『瑜伽論』等の三性説と論理的構造が異なるわけではない。このことを、両論書を精査する中で論じた。

第四章、世親の三性説は、『唯識二十頌』の三性説を解明したものである。『唯識二十頌』は、表面的には、能分別||依他起性、所分別||遍計所執性といった三性説を説いているかのようである。しかし、仮設や転変等の概念の正確な理解のもとに、子細に検討するとき、護法の解釈(『瑜伽論』等と通底する解釈)は極めて妥当であることを示した。

第五章、『成唯識論』の伝える安慧の三性説では、スライラマテイの『唯識三十頌釈』のそれとも異なる安慧の三性説が、弥勒・無著・世親の三性説ともいかに異なるかを、護法の批判なども参照しつつ明かしたものである。特に唯識のアヒダルマ(とりわけ心所論)等に照らしても、その論理的妥当性に欠けることなどを論じた。

以上において、従来の三性説の一般的理解に相違し、弥勒等

から護法に至るまで、瑜伽行派では一貫して同一の論理構造が継承されていたことを実証したのである。

第二部、三性説の哲学的究明は、第一部において領解された三性説の基本的理路をふまえ、三性をめぐる個々の問題について掘り下げたものである。全体が三篇に分かれるが、その各篇は、順に、遍計所執性をめぐる問題、依所起性をめぐる問題、円成実性をめぐる問題に対応する。

第一編の第一章、言語の存在論的性格は、言語そのものがいかなる存在であるかの仏教内における論議を辿ったものである。唯識では、言語を実在とは見ない。しかし不相応法として独自の法とたてる（色法に還元しない）点で、むしろ経量部とは異なり、説一切有部とも親しいものがあることを指摘した。

⑨第二章、言語と意味論においては、遍計所執性が名言所計であることから、言語（特に名）の表示対象は何であるかを、改めて追跡したものである。それは共相（一般者・普遍）なのであり、しかも、他の否定（アニヤアポーハ）に帰着するのである。

第三章、五感と意識は、能遍計が特に意識に求められることから、主に意識と前五識（五感）との種々の相違点について、確認しようとしたものである。前五識は、現量にて自相のみしか認識しないのであり、遍計所執性が言語（共相）と不可分のものであるなら、それら五感の地平にはそれはありえないことが明瞭となろう。

第四章、認識過程と言語は、能遍計の意識が、遍計所執性を

産出する過程はどのようであるかを、可能な限り追求したものである。また本章では、そのこととともに、意識の遍計のはたらしが、後の依他起性を産出すること、いわば言語が存在を形成することが唯識の中で考えられていることにも言及した。

第二編の第一章、現象世界の存在論的性格では、幻の譬喩によって語られる他依起性の、行相（形象）としては有るが存在としてはないという規定の、その存在論の意味を検証する中で、中観派が論難する依他の有の立場の意旨を究明したものである。

第二章、存在の多元論的解釈は、唯識ということが、実は唯心王（識）・心所という多元的なダルマの縁起・相続によって世界を説明する、いわば要素還元主義的理論の側面もあることを明らかにし、また、心所の実有如何に関し唯識と華嚴とが『大乘莊嚴經論』の一句を教証として共有する、その分岐点について考察した。

第三章、多元論と縁起説は、唯識教学の中に、十八界に対する理解を基本とする界善巧の系譜があることを指摘し、それこそ、自在神等を否定する縁起の世界観の根幹をなすものであることを明したものである。また、阿頼耶識の教証としての「界」が、実は多元的な種子のことに他ならないと解釈されていることも指摘した。

第四章、認識理論の展開では、初めに説一切有部が玄奘下では有形象知識論と伝えられていることの妥当性について検証した。次に、唯識の識理論を辿り、主として二分説と三分説の間の共通点と相違点について分析した。唯識の有形象知識論に三性をどう適用するかは種々議論のあるところだが、行相が識そ

のものに他ならないとき、やはりそれは依他起性と別のものではないだろう。

第三編の第一章、現象世界の實性は、初めに各唯識經論の円成實性の定義を収集し、後に特に真如として語られる場合の様々な性格について分析したものである。とりわけ自性円成・自性清浄への視点は円成實性の理解に欠かせないものであり、これと如来藏思想との同異についても考察した。

第二章、存在と普遍は、他依起性は自相（究極の特殊・個物）の方向に自相を超えたもの、円成實性は共相（普遍、一般者）の方向に共相を超えたもので、しかもこの両者が不二・不異の關係にあることを究明し、我々の存在そのものが、この構造の理に貫かれていることについて論じた。

第三章、実存の轉換と存在は、轉依の所依を法性に見る立場と依他起性に見る立場とを對比させ、そこにある二性の重層的轉換の構造を明らかにした。また、所依は本来、個体そのものを意味するのであり、唯識の中でそれは種子や阿頼耶識ではなく、心王・心所の相統としての依他起性に見出されるべきことを論じた。

第四章、覺の世界は、無分別智と真如の關係について、主として、見道の情景の描写をもとに解明したものである。一般に、無分別智には、相分・見分のない智が考えられがただが、護法は、実は見分のみ有りとすることに注意を促し、その根拠とされている『瑜伽論』の所説の論旨の究明を試みた。

以上、本研究は、三性説の論理とそこに含まれる種々の問題

竹村牧男著『唯識三性説の研究』（池田）

について、広く唯識文献を探查しつつ、またその表層のみでなく、深層の論理構造こそを掘り下げ、比較・検討することを通して、哲学的・論理的に究明しようとしたものである。

唯識哲学は、極めて高度な存在論・認識論・言語哲学が渾然一体となった一大哲学体系であり、実体論を否定する傾向にある現代哲学とも大いに通いあうものを有している。この東洋の伝統の中の一つの偉大な思想的財産が、今後ますます注目をあつめ、適切に活用されるようになることを、祈らずにはいられない。（i—v頁、傍線引用者、以下同）

以上が著者自身の手による本書の要約である。興味深いテーマが数多く取り上げられており、本書の扱う研究分野が非常に広範であることが理解されるであろう。

三 方法論について

本書の著者である竹村牧男博士の理念がすこぶる崇高なものであることは以上の「はしがき」にも明らかである。博士は「仏教学」という学問に対する御自身のお考えを序章において次のようにおっしゃっている。

仏教も宗教の一つであり、したがって仏教学は、宗教学の一分野と見ることもできよう。今、岸本の理論を仏教学にあてはめてみると、宗学・仏教哲学・仏教史学・仏教学（狭義）の四つとなる。この中、本研究においては、ほぼどの分野に相当する研究をなそうとするのか、ここにまず確認しておきたい。

一般に、日本印度学仏教学会を中心に行われている我が国の仏教学は、主として文献学的実証主義に基づく思想史研究であると

いえよう。それは、前の四つの分野の中で言えば、仏教史学の中に入るものである。筆者もまた、本研究において、まずその作業をふまえたいと思う。

しかしそこにとどまることなく、さらに、仏教のある思惟構造について出来る限り明らかにし、その思想の基盤にある論理を究明したいと思っている。

このとき、単に仏教思想史にとどまるのではなく、様々な文献に共通の論理を見出し、それに表現を与えて明らかにしていくということをめざしたい。ここではある意味で狭義の仏教学に関する一般的・客観的研究を推進することになる。さらにそれをふまえて、問題の本質やその思想の人間にとっての意味を問い尋ねるという意味で、仏教哲学的な研究をもめざしたい。そのようにこれら三つの領域にまたがる形で研究を進めつつ、最終的には、三性説の論理構造はどのようなものであるかをつきとめ、その哲学的な意味について考えようとするものである。

手短かに述べれば、文献の実証的な研究をふまえつつ、仏教思想史、及び仏教思想の客観的な研究を遂行して、仏教哲学への展望を切り拓こうとするものである。（二六頁）

ここには著者の意識する「文献学的実証主義に基づく思想史」「思想の基盤にある論理の究明」「仏教哲学的な研究」という「三つの領域」が述べられている。そして、いよいよ本書における具体的な三性説研究の方法論が述べられることになる。

そこで、これだけ時代的に幅のある対象「弥勒・無著・世親から陳那等を経て、護法・戒賢に至るぐらいまで、引用者注」を扱うので、まず、唯識の思想史の研究がめざされる。三性説

の表現ばかりでなく、①論理構造そのものの変遷があれば、それをまず追跡しておくことは欠かせない。

ただ、注意したいのは、歴史は直ちに進歩・進展ではない、ということである。持続もあり、れば反復もありうる。展開と一口に言っても、論理的な変転を含む場合もあれば、同一論理構造をふまえての一層の細密化の場合もある。②歴史（時間）の進行において、あらかじめ、思想の進歩・変転があるに違いないと決めつけておくことは、避けるべきである。

ところで、今日、初期唯識思想史に関しては、なお不確定の要素が多く存在している。弥勒の実在如何、世親の二人説如何『瑜伽師地論』がの成立過程如何、等々、様々な問題がある。これらの問題は、むしろ各論書の思想内容を詳しく検討することを通じてこそ、解決されるであろう。筆者としては、従来の研究成果、特に最近の勝呂信静『初期唯識思想の研究』の成果等を十分受容しつつも、さらに種々の文献の思想の検証・解明を通じて、これらの問題に何らかの照明をあてることができれば、と考えているところである。

ただ、その場合でも、③特に弥勒造といわれる論書にあって、頌と長行をどのように扱うかは問題であろう。中国とチベットに、ともに「弥勒の五法」の語が伝えられ、中でも『弁中辺論頌』と『大乘莊嚴經論頌』はどちらにも共通するだけに、それは弥勒の作、または少なくとも無著の自作ではない、④無著以前の論師の説教であろうと考えられる。

その場合、まず、『弁中辺論頌』と『大乘莊嚴經論頌』が、歴史的に実在した同じ一人の論師の作であるかどうかは問題であ

る。

そしてこれらの頌は、よしんばそういふ何らか下敷になるものがあつたとしても、⑤実際に編集し、その形に制定したのは、無著・世親らであつたとも考えられる。このことを、主にこれらの帰敬頌を詳しく分析して、山口益や勝呂信静が論じている。このとき、頌そのものに、すでに編纂者によって手が加えられた可能性もあるであろうし、少なくとも無著・世親によって了解（了承）された形になつたのであろう。さらに⑥その頌は無著・世親によつて、長行のように解されるべきものとして確定されたのであり、そこに瑜伽行派の教学が確立されたといふべきである。

⑦そうであれば、仮に歴史的に、無著以前と、無著及び世親と、ある落差があつたとしても、「瑜伽行派の思想」を追求するという立場からすれば、頌の思想を長行から全く切り離して考察するのは無意味である。

本研究では、「弥勒」の思想を、無著・世親と区別し、その特質を追求すること、換言すれば、瑜伽行派以前と無著以後の間の諸問題を、中心の問題として追求することは目的としない。⑧したがつて、頌と長行とは、一連のものとして理解していく方法を採用したい。

⑨ちなみに、『瑜伽師地論』は、現存の形態としては、やはり無著らによつて認められた形なのであろう。これも瑜伽行派の文献として扱うこととする。

ともあれ、インドにおける、無著・世親以降、およそ三百年ほどの歴史の中で、三性説の思想史はどのようであつたのか、

が明らかにされなければならぬ。

さて、この場合、特に焦点となるのは、一つはいわゆる弥勒書と呼ばれるものに出る三性説と、無著自身の三性説、さらに世親の三性説との関係である。前には、弥勒書も無著・世親によつて成つたのだという立場を支持することを表明したが、そうだとすると、それらと無著自身の著作等との間に単に表面的な諸相のみならず、⑩思想の基盤そのものに異なるものがあるとしたなら、そのことが解明されなければならないであろう。

ただし、無著らが自ら編んだ論書と、自ら著した著作との間に根本的に相い反するような対立点があるかは疑問である。逆に表面上の諸相の相違にもかかわらず、この間に一貫した論理が存在しているなら、それは詳しく解明されるべきであろう。我々は術語的な差異などの表層のみに目を奪われてはならない。（三十八—四十頁、①—⑩の番号と傍線は引用者）

以上の記述に著者の基本的問題意識と研究態度が表明されている。これは本書を読む際に最も重要であると筆者には思われる。

まず著者は①において論理構造の差異の追跡に強い意欲を示す一方、②では単純な進歩史観を慎重に退けている。しかし、③以降、いわゆる弥勒論書の扱いに対する著者の見解には筆者は驚きを禁じ得なかつた。

いくら⑤のように無著・世親がいわゆる弥勒論書の編集・制定に関わつていたと仮定したとしても、⑥その頌が無著・世親によつて、長行のように解されるべきものとして確定し、⑦頌の思想を長行から全く切り離して考察するのは無意味、⑧頌と長行とは、一連のものとして理解」といふ著者の論理からすれば、瑜伽行派の研究は

無著・世親以前には絶対にかかのばれず、「④無著以前の論師の説教」の存在を認めていながら、その「論師の説教」は永遠に明らかにならないことになってしまふのである。このような見解は三性説の起源を強く希求する著者の考えと矛盾するように感じられる。しかし、⑦には個別的な「落差」よりも全体的な「瑜伽行派の思想」を選択しようとする著者の学問的態度が表明されており、また、⑩の文章にも明らかかなように、著者は、瑜伽行派における何らかの思想的相違や差異よりも、同一性を強く求めているのである。

四 方法論の問題点

このような方法論に関して筆者から見ても重大な問題は、著者の先行業績に対する態度である。著者は瑜伽行派の三性説解釈に差異よりも同一性や継続性を望んでいるのであるが、それならば、「瑜伽行派の三性説解釈に大きな相違があった」とする異論がもし存在する場合、それを何とか排除しなければならないはずである。以下、異論を提示している先行業績に対する著者の態度を見てみよう。

いわゆる弥勒論書の偈の作者・編纂者・注釈者という三者について、三性説の思想的差異を指摘する以下のような論文が既に存在している。

- 菅原泰典「初期唯識思想に於ける三性説の展開(一)」『東北印度学宗教学会論集』第十号、一九八三年、一二八—一三〇頁。
同「弥勒の原意と世親の改変」『印仏研』三三一—一九八四年、(六六) — (六八) 頁。

同「初期唯識思想に於ける三性説の展開(二) — Mūla-tattva に関して」『東北印度学宗教学会論集』十一号、一九八四年、一

六四—一六五頁。

同「初期唯識思想に於ける三性説の展開」『文化』六〇—二一九八五年、三七—六〇頁。

筆者から見れば、この一連の菅原氏の御論考は非常に優れたものであり、三性説を考察するうえで絶対に欠かせない研究である。しかし、この菅原氏の御業績は本書では何ら言及されることがない。著者が「④頌の思想を長行から全く切り離して考察するのは無意味である」とするならば、異論に対し何らかの有効な反論が必要不可欠ではなからうか。

また、兵藤一夫氏による以下の論文では、『大乘莊嚴經論』第十一章の有名な「幻術の比喻」の解釈について、世親とステイラマティとの三性説に関する解釈の相違が鮮やかに指摘されている。

兵藤一夫「三性説における唯識無境の意義(2)」『大谷学報』七〇—四、一九九一年、一—三頁。

同「唯識三性説—世親と安慧—」『大谷学報』七一—四、一九九二年、四五—四七頁。

著者は実はこの兵藤氏の論文を参照している。「あるいは『成唯識論』が安慧の説として伝えるような相分・見分¹¹遍計所執性、自体分(自証分)¹²依他起性の説が弥勒論書にあるという見解も見られるが(第一部、第一編、第三章、一四九頁)」と述べて実際に兵藤氏のこの論文を注記に掲げている(二八一頁、注三)。しかし、本書のまさしくその幻術の比喻を検討する箇所(第一部、第三章、一〇—一〇二頁、第二部、第二編、第一章、三二五—三二六頁)では、著者は同じく世親とステイラマティとの思想的相違に言及しているにもかかわらず、いち早くそれを指摘した兵藤氏の御業績には何の言

及もない。しかもその兵藤論文には先に紹介した菅原泰典氏の論文が参考文献の一つとして検討されているのである。

先行業績の明記、異論に対する積極的反論、及び、その異論を覆すだけの十分な論拠が提示されていれば、本書の価値は著しく飛躍したであろう。

五 「いずれにせよ」について

ここでは著者の使用する「いずれにせよ」もしくは「いずれにしても」という言葉に注目し、その根底の思考様式を検討したい。やや瑣末ではあるが、その重要性は次節で明らかになるであろう。

本書には「いずれにせよ」と「いずれにしても」という言葉が計十回登場する(四、六十九、七十四、一一〇、二二四、二二六、二二〇、二五〇、三〇〇、三二七頁)。筆者はこの「いずれにせよ」「いずれにしても」という言葉を目にするたびに、それまでの学問的興奮が一挙に冷め、その緊張は弛緩してしまった。

この「いずれにしても」という言葉は、AやBという複数の何か対立した項目が存在する場合に、その対立に対して判断を中止しひとまず保留しておくとか、その解決を求めないとか、その対立とは全く関係ないことを述べようとする際に使用されるのではないだろうか。従って、それまでのAとBという対立はただ単に読者に提示されただけで何の解決もなされず、宙ぶらりんで終わるような気がするのである。しかも筆者にはそのAやBとの対立こそがひどく重要であるように思えるのである。

例えば、本書二二―二八頁には、三性説を考察する場合に極めて重要な「言語表現とその対象との関係」が論じられている。著

者は『撰大乘論』II, 24の記述を引用し、次のように述べている。この文章の「いずれにせよ」という言葉をどのように考えたらよいのであろうか。

このような、①名前覚無、②多名、③不決定という、三つの理由から、名と対象とは、決して一体のものではないというのである。

これを三性との関連で見れば、「A対象は依他起性、名は遍計所執性と考えられよう。しかし、「B」『世親釈』は、「ここで、名は依他起であり、義(対象の実体として表わされたもの、意味)は遍計所執性であると安立されたのであって」といっている。その理由は、玄奘訳によれば、「以依他起、由名勢力、成所遍計故」(チベット訳にはない)といっている。いわば、言語の対象としての依他起性は、名の勢力によって所遍計となる、それと義(意味、遍計所執性)との関係の問題だといっているのである。つまり、名 \parallel 依他起性 \parallel 所遍計 \parallel 指示対象、義 \parallel 遍計所執性 \parallel 意味 \parallel 表示対象として、その非一体性が明らかにされているというのである。

確かに、今の名と義において、名はいわゆる能詮としての名ととってさしつかえないし、そのとき、義は意味であり、言語によってあらわされたものこととなる。しかし、一般には、言語とその指し示す対象(指示対象)の関係の問題にしているところの方がわかりやすい。おそらくこの「名・義」に対しては、やはり「意味・対象」の関係を読むことがふさわしいと思われるが、同時に、「対象・意味」の関係としても読むべきなのかもしれない。いずれにせよ、「C」依他起性と遍計所執性は同

一体ではありえないのであり、（したがって、ともかく依他起性
は一面、遍計所執性でもあるということとは、本来ありえない）、
このことは、名もしくは名によって表わされたものとその指示
対象が一致しないことを示しているのである。（「A」、「B」、

「C」、傍線は引用者）

この「いずれにせよ」という言葉の前と後の論理的関係を考える
とき、この「いずれにせよ」という言葉によって、それまでの「A」
と「B」との議論は唐突に打ち切られ、その議論が生かされること
なく、著者の望む結論「C」が提示されているのではないかと筆者
は考えてしまう。

「A」と「B」は全く異なった見解である。確かに、ただ「C」
だけを主張するのであれば、「A」と「B」との対立はあまり関係は
ないかのようにも感じられる。しかし、その直前までに議論されて
いた「A」と「B」との対立はどこへ行ってしまったのか。

「A」と「B」では依他起性の内容がまったく相違しており、こ
のことは三性説に見過ごすことのできない問題である。「A」
物が先か「B」名称が先かという問題はラフに言えば以下のような
ものであろう。

・「A」物が依他起性であるならば、虚妄な名称によってその物を
認識すること無く、無分別智によってその物をありのままに認識し
なければならぬ。このとき消滅するのは依他起性の物ではなく虚
妄な名称のほうである。（↓依他起性は存続）

・「B」もし名称が依他起性であるなら、そのような虚妄な名称は
消滅しなければならない。（↓依他起性は消滅）

ところが著者は「いずれにせよ」といつてしまうのである。この

ようなところにも差異よりも同一性を求める著者の思想が現れてい
るように思われる。

また、「ちなみに」という言葉も非常に多く、気になるところでは
ある。

六 本書の結論について

このような著者の方法論、即ち、文献の瑣末な表層的記述表現の
相違にとらわれず、その基層に隠れている大きな思想の流れを探り
当て、差異よりも同一性を強く求める方法論からは、

瑜伽行派では一貫して同一の論理構造が継承されていた(III頁)
という結論が導かれるのは必然といつてもいいであろう。

また、著者は依他起性に対しても次のように述べている。

このように、唯識説では、依他起性が一貫して、名言の所依
であり、執着の対象の位置にあるものである。(三三六頁)
以上の本書の結論の当否は今後の研究によって確かめることに
なる。著者とは別な方法論、即ち、文献のわずかな記述の相違に重
大な思想的変化を読み込む方法によって検討されることになるであ
らう。

七 おわりに

筆者の浅学のため内容的に詳しく扱うことができず、あまり充実
した書評とはならなかったことを反省している。本来であれば本書
に述べられた多くの貴重な学説に対し、同じ文献にあたりながら一
つ一つ個別に検討し問題点を指摘するのが評者としての義務である
が、筆者の無能からそれは不可能であった。

著者に対し随分失礼なことを書き連ねてきたが、本書の学問的功績はいささかも変わらない。今後、瑜伽行派の研究を志すものは必ず本書を開き、著者の個性的な思想に啓発されつ続けるであらう。

(一九九七年七月十日)

〔竹村牧男著『唯識三性説の研究』、はしがき、目次、略号表、凡例 xviii 頁、本文五六六頁、索引十六頁、英文目次、英文梗概十頁、平成七年二月二十八日初版発行、東京、春秋社、菊版、定価二一〇〇〇円、ISBN4-393-11185-5〕